

## そらいろのおかゆ

パタパタパタつ、てハタキの音が、部屋に響いた。わりと好きなんだよね、これ。あまり使っていないとこでやると、ゴホゴホしちゃうけどさ。

「ヒメ、終わりましたか？」

そろそろ綺麗きれいになったかなー、ってころ、部屋の外から声が聞こえてきた。

「だいたいできたよ、リボン。そっちは？」

「準備はおつけーですわ。ただ、どなたがお見えになるのか、それが心配ですわね。」

ハタキの先を払ってほこりを落としながら振り向いたら、三角ずきんかぶったりリボンがそう言っていたしを見上げてた。

そう。実はわたしもリボンも、それを知らないんだよね。

9月ももうじき終わりの日曜日。今日は1日、神

さまがおでかけで、めぐみたちもいろいろやることがある、って言うから、わたしは昨日の夜から洋服のアレンジしなおしてたんだよ。そしたら神さまが、お昼の前に急に帰ってきてさ、『お客さんが来るから、空いてる部屋を一つ片付けて』って。それだけ言ってまた出てっちゃって――

「ベッドも、一応用意はしたけど、泊まってくのかなあ、お客さま？」

さあ？ってリボンが首かしげてる。

そういや、こないだはファントムが使ってたっけ、この部屋。まあ、シーツもまくらも洗いなおしたし、問題ないと思うけど。一応は大使館ってことになってるんだし、みつともないことできないよね。

リンリンリン

あれ？この音

「呼び鈴びいりん、みたいですね。このあいだ、変えました

3 そらいろのおかゆ

よね、ヒメ」

ああ、そっだっけ。きれいな音の方が気持ちいいだろうと思っただけで、ちょっと音が小さすぎたか

ゴンッ！

って何よ、その音はっ!?

「はーいっ!」

わたしは走って、玄關に向かったんだ。

\*\*\*\*\*

「はいはい、はいはいーいっ!!」

呼び鈴はさっき一回鳴っただけなんだけど、そのあとで玄關のドアがごんごんノックされて。そんな焦<sup>あせ</sup>なくていいじゃん。まったくもお

「はい、いらっしや って、え?」

お客様だっというから、とりあえずちよつとよそ行き<sup>き</sup>の返事しようとして、途中で止まっちゃった。だっ

て、ドアの向こうにいたの、

「ゆうこ? ああ、いまお客様が来るから、片付け中なんだ。ちよつと待って って、ええっ!」

ゆうこの顔が、いきなり近づいてきたと思ったら、わたしの方にぶつかった。ちよ、ちよつと、これ、

「い、いきなり倒れてきたあ!」

そっか。さっきのごんごんノックって、これかあ ってことは、

「ちよつとゆうこ、大丈夫? なんてこんなふうらら 熱っ!」

身体でゆうこ支えたまま、片手で顔あげようとしたんだけど。なによこれ、すっごい熱じゃないの!! 「ヒメ、どうしたんで って大変ですわ!と、とりあえず中へ。ああ、でもどこへ運べば」

あとから来たリボンはそう言っただけ。わたしは

あーもう! しょうがないなあ。

「リボン、さっき片<sup>かた</sup>した部屋に連れてくわよ」

「え？で、でも、神さまのお客さまが」

「そんなの、あとでわたしがいつくらだつて怒られてやるわ！ ゆうこが先だよ、当然!!」

リボンが目をばちくりしながら、でも頷いてくれた。よし、そんなじゃー！

「だ、い丈夫。おきゃくつて、私だから」

目の前の両腕がかえた手に力を入れたら、息の音といっしょに、言葉が聞こえてきた。ゆうこ？

「きょうは、うちの店でパーティ予約あるんだけどへへ、夏風邪ひいちゃったあ」

言った瞬間、ゆうこがちよつとむねのあたりおさえて、何度かむせはじめた。

なんか、せきするのおさえてるみたい　じゃ　ないでしょ、　じゃー！

せきくらい、ちゃんとやりやいいのよ。顔にツバでも飛ばなきや、わたしは気にしないんだからっ。

「お客様の前でゴホゴホされたら困るから寝てなさい、って言われたの。でも、病気のひとが家にいる

と、気になっちゃうでしょ？」

ああ、そっか。パーティのもてなし側が気もそぞろ、つてわけにいかないよねえ。

「そうしたら神さまが、ご挨拶にきてくれて　大使館は部屋も余っているし、ヒメちゃんの友だちなら歓迎です、つて。だから、1日だけ、ごめ」

次の瞬間、コンコンコンって音。聞いてて胸が痛くなるせきの音だよ。

「わーかったから、もつしゃベンなって！　すぐベッド、連れてったげるからね」

わたしは、首にもたれかかってたゆうこを抱きかえた。けど、どうやって運ぼう？

考えてたわたしの耳に、はあ、はあ、って息の音が　苦しそう　しょうがない、か！

「ひ、ヒメ、なにするつもりですの!?!」  
倒れこんでるゆうこの膝のうしろに手をやると、リボンが言ってきた。そんなの、決まってるじゃん。

「こないだ、ゆうこがファントム運んだでしょ？　それ

5 そらいろのおかゆ

と同じ。たしか、お姫さまだっこ、とか言ってたっけ」  
ええと、たしか相手の腕をわたしの首に回して、背  
中と膝をかかえて、っと。

「お姫様だっこ　　そうでしたっけ？」

あれ、リボン見てなかったっけ。わたしはぼっち  
り覚えてるんだけどな。

「そっだよ！わたしもおなも、あきれて見てた  
んだからね」

抱きかかえたまま大使館に行っちゃうんだもんなあ。  
ふたりして口あんぐり開いちゃって、止める気にも  
なれなかつたくらい。

まあ、めぐみと誠司は平気な顔してたけど　多  
分、むかしからそっいう子だった、ってことなんだ  
よね。

「ゆうこのピンチなら、わたしがやるわ！本物の  
お姫さまだっこ、みせてあげる！」

「い、いえ、それは意味が違　　ああっ、あぶない  
ですわっっ!!」

おとっつとっつとっ！

首に回したゆうこの腕で調子とって、身体持ち上げ  
よつとしたら、そのまま後ろに倒れそうになっちゃっ  
た。そんなに重いわけじゃないんだけど　　ゆうこ  
にできて、わたしは、ダメ？ううん！

「くっそあゝっ！ぜゝったい運んでやるっつ！」

両足よいしょと広げて、踏ん張りきかせて、

「ヒメったら、ガニ股にまでならなくても　　」

って、いちいち突っ込まないでよね　　もう！

「うるさいっ！こつなりや意地でもだっこしてやる  
わ。とおりやあゝっつ！」

もうカツコなんて気にしてらんない。両手でゆう  
この身体をかかえて、っ

「ん？おおっ、できたあっ！」

抱える腕が、ちよつと軽くなった。わたしが歩  
けば、そのまま動いてく。よあし！

「ヒメ。よく見てください？」

へ？

歩いて階段に向かおうとしてるわたしのお腹を、リボンが突っついてきた。なにさ？

って、リボンが指さしてる先みてみたら、ゆうこの足が床について、そのまま歩いてた　はあ。

「お姫さまが、だっこしてるから、お姫さまだっ。」  
文句ある、リボン？」

そのままわたしは、さつき掃除した部屋に向かつて階段を上がってたわ。

ゆうこの足といっしょに歩いて、ね。

\*\*\*\*\*

「さて、っと」

客間のベッドにゆうこをもぐりこませて、タオルでくるんだアイスノン頭に乗せて、なんとか一息ついたんだけど　さて、これからどうしよっかな。

「看病って、やったことないんだよね　」  
される側はあっただけさ。まだ、ブルースカイ王

国が無事だったころ、ね。

病人には近寄らないのがわたしのしごと、とか言われてさ。こんな近くで病気の顔みることもなかったもん

ん　あれ、なんか顔がにこにこしてるな？ あっ、「ひとの一人ごと、寝たふりしながら聞いてンじゃないわよ！　ちゃんと寝なさいっ！」

まったく。油断もスキもあつたもんじゃない。

「ふりしてるくらいなら、どうして欲しいか言やあいい、ってのよ」

はたん、と部屋のドア閉めて階段降りながら、言葉が勝手に出てきたよ。

そつ。言やあいいのよ、わがままくらい。病人なんだからさ！

「ま、それを言わないのがゆうこなんだけどね」

言っただけから、ちよっと笑っちゃった。ゆうこだけじゃないか。めぐみもおなも、それに誠司まで。みーんないじっぱりなんだもんなあ　って、あたしもか。

7 そらいろのおかゆ

「これでよくもってるなあ、ハピネスチャージタームは」

それも、ゆうこのおかげ、ってところあるんだよね

「よし！今日くらいはお世話しましょっか！」

\*\*\*\*\*

「ねてる　かなあー？」

おおきなカゴ抱えながら、ちいさめの声でゆっくりドアを開いたら、奥のベッドの上でアイスノンがちよつと持ち上がった。

うん、ちよつと顔色よくなったね。それじゃ、っと

「はい、お着替えの時間ですよー」

寝てる間に、むかし病気だったときのこと思い出しながら、いろいろ揃そろえてみたんだ。

とにかく寝かせるのが先！だったから、来たときの服のまんまでベッドに放り込んだもんねえ。一応ちゃんとした寝巻も持ってきたし、さっさと着替

えさせないと。

「お風呂は入れないからね。おしぼり持ってきたよ。ちよつとあつたかくするから、さあ、脱いで脱いで」

エアコンちよつと弱くして、寒くないようにしながら、あつた温めといたおしぼりだして

「ん」

あ、ごらー！

「ああ！もつ、カードで変身しようとかすんじやないの！ちから使っちゃうから、治り悪くなるじやないさ？」

「そうかな　でも、着替えて、ある？」

ああもつ、ちゃんと起きれるようにはみただけだよ、

「あるよ、ほら！サイズはいろいろ。こつちで買ったのもあるし、リボンが作ったのもあるし」

病人がんな心配すんじやない、っての！

「もう汗びっしょりじやない。ほら全部脱いで、カゴ入れちゃってせ」

持ってきたカゴから寝巻とかが出して、ベッドの脇に置いて、と。ええと、おしぼり冷えてないよね

「ヒメちゃんのばんつって、ヒメちゃんが洗ってるの?」

へ?

「だから、ばんつ」

一瞬、なに言ってるのかわからなかった。けど。

「ばんつ　パンツう!?!」

「そう。下着の方の。いま、脱いでって言ってたばんつ。どうかしたの?」

どうもしてない、よね。うん。単にパンツの洗濯のはなしだもん。

「リボンが洗ってるのかなあ、とも思ったんだけど」「わたしのばん　下着は、わたしがちゃんと洗ってます!　ブルースカイ王国でだって、ひとにまかせたりしてないんだから」

って、言った瞬間にゆうこの顔がハテナになった。

「なによ、その顔は」

「ううん、ちよつと、意外で」

あ、なんかカチンとくるな。

「わるかったわねえ。やってそうじゃなくて」

「そうじゃなくて　まわりの人が止めるんじゃないかなあ、って。そっか、自分で干してるのか

じゃ、神さまのばんつも、ヒメちゃんが?」

神さまのばんつう!?!

「いやあ　そう言えば、見たことないなあ、神さまの洗濯ものって」

「替えてない、わけじゃないわよねえ」

そんなわけは　でもほんとだ。なんでわたし、知らないんだろ?

「それはですね。ブルーさまは、ご自身で洗濯なさるからなのですわ」

あれ、リボンの声?

ドアからとことこ歩いてきたリボンが、わたしの肩にひよいっと飛び乗ってきた。

「そうだったけ？ だから洗濯機に男物入ってたことないのかあ」

「あれでも気を使われてるんです。ブルーさま」

あれでも、だって けっこ言うなあ、リボンも。

ああ、いけない。そんなことより着替えだよ。さっさと脱いでからだ拭かなきゃ。

「中学生の女の子には、男物はさわられない、ってことかしら。逆は問題ないのにね。相楽くんとか」

いいっ？

「せ、誠司が、なに？」

「よく女の子のばんつ、洗ってるものね」

えへっ!?

「ほ、ほんとに？ まさか、めぐみのを」

「めぐみちゃんのは洗ってないなあ。お隣さんだから、干してるのはよく見てると思うけど。洗ってるのは妹さんとか、お母さんのよね、自分のといっしょに干してるんだもん。普通に」

あ、あ、ああ。そっか。そりゃそうだよな。

っていうか、なにほっとしてんのよ、わたしは！

「あ、そういえば、相楽くんのばんつの色、知ってる？」

「知ってるわけないでしょ!!」

思わず声が荒くなつて、口おさえちゃったよ。いけないいけない。

「そっかあ。白、なんだよねー」

しろ？へえ。意外だな。

「走ったりしてるし、汚れるから色付きかと思った。

白なんだ で、なんでそれ知ってるの？」

「めぐみちゃんが言ってたあ。きょうも白ばんで、妹さんとお揃いだな って」

思わず天井上げちゃったじゃない。男子中学生が、女子小学生とおそろいって、あなた

「かわいいよねえ♡」

ん、かわいい、ねえ。まあ、わからないこともないけどさ。



「で、ヒメちゃんは、白？」

「ううん、今日はピンク。って、なんの話よ!」  
 がぼつと顔もどしたら、脱ぎ終わったゆうこが立つてた。

「あー、じゃわたしの替えもピンクでいいよ。おそろい、おそろい。」

「いいから、とつとからだを拭いて下着に寝巻着て寝てろっつ!」

「つてこらあーっ! すっぱんぼんのまま抱きついてくるなーっ!!」

いきなりなにすんのよ。もうそんな熱ないじゃないのっ!」

「ヒメちゃんあつたかいし、だめえ?」

「だーめに決まってるでしょーがあ! つたく、からだ押し付けて、なに考えてんのよ。」

ゆうこのからだを押しつけた瞬間、ふつと手が自分の胸にとまった。 もっつ!」

「かわいいよねえ♡」

「イヤミがこらあつっ!!」

いや、いやいやいや、もう騙たまされないぞ。こんなときイヤミなんか言つ子じゃないって、知ってんだかんね!

「ひとりになりたいなら出てったげるからさ、もちよとちゃんと言つてよね!」

あたしだって、心配してんだから」

リボンが持ってきた、暖かいおしほりをゆうこに渡して、わたしは背中向けたんだ。

「ん。ごめんね♡」

わかってるよ。わたしたちは、チームなんだもん。

\*\*\*\*\*

台所でエプロンつけて、まわりをぐるつと見回しながら、使いそうなもの並べてみた。

ああ言つとけば、ゆうこもちゃんと着替えて寝てらだろっし。そのうちお腹もすくだろっつから、から

11 そらいろのおかゆ

だの中もあつためないとね。

さて、

「おかゆ、か」

せとものナベを見てると、ファントム思い出し  
ちやうな。あのとき、おかゆ作つてたゆうこは、え  
えと、まず

「材料は、お米、だっけ？」

「本も見ないで大丈夫なんですか、ヒメ？」

へ？

振り向いたら、リボンがじつとこつち見てた。

「だーいじようぶ。まずはお米をナベに入れて洗つ  
て、と」

「ざーっ、とナベに半分くらい入れてから、流しに  
持つてつたら、

「ヒメ、台所洗剤なんかで洗つたりしちやダメで  
すよ？」

言つと思つた。はあ。

「失つつ礼ねえ、わたしだつて漢字くらい読めるわ

よ。米を磨<sup>みが</sup>くんだから、クレンザーでしょ？」

すばかーんつっ!!

「あいたたたた、なーにすんのよりボン！」

「なーにすんのよ、はこつちのセリフです！」

お米は『磨く』んじゃなくて、『磨<sup>と</sup>ぐ』んです。お  
水だけで！」

あ え？

わたしがちよつと迷つてたら、目の前のリボンが  
ため息ついた。ふう、つて。

「ヒメ？ お米ははお祈りしながら洗うんですよ」

え？

「お祈り？」

そのまま流しに入つて、お水入れたナベの中に手  
を入れて、

「そうですね。ほら、こつちやつて」

あ、両手で水の中のお米をはさんで ええつ、ほ

んにお祈りしてる!？」

「こうするとすねえ、お米とお米がスリスリされて、やさしくきれいになってゆくんです」

スリスリ、スリスリ

うん。わかるよ。少しずつきれいになってくの。

リボンの、こんなにちっちゃな手で、少しずつ、少しずつ

「代わるよ、リボン」

「はい?」

そつだよ。わたしの方が手が大きいんだもん。いままで、こんなちっちゃな手のおつきな思いを、わたしはずっと受けてきたんだもん。

「できるよ、わたしには。やってもらえばなしになんて、なるもんか!」

\*\*\*\*\*

ばーんっ!!

いけね、ドア蹴<sup>け</sup>っちゃった。しょうがないんだけどさ、両手ふさがってるんだから。

「はいおまちっ!!」

ちよつとヤケぎみに声あげたら、向こうでベッドから起きた人影がみえた。

「わ、きたきた。おかゆね」

うん。さっきよりいい顔になってるよ。それじゃ、ナベをテーブルに置いて、そのままゆづこの前に、と。

「はい、わたしのおかゆ。文句言わずに食べてよね」  
スプーンを渡してナベのふたをとりながら、わたしはできるだけ元気に言ったんだ。

徹夜したからちよつと眠いし、それ以上に味見はしたけど、そんなに自信ないから、ね。

そしたらゆづこが、スプーンですくったおかゆを、わたしに見せてきて、

「ふふふ。おかゆに、ヒメちゃんが映ってるわ。

空色の髪の、空色のおかゆ、ね♡」

ほんとか。青い、おかゆ、か。

「わ、わかるかったわね。どうせ食べにくい色です

よーだ。味だつて、慣れてるひとよりさあ」

ぱくっ

青いおかゆを口にいれて、ゆうこがちよつと笑った。

「んーそうね 実はいちばん上手なのは相楽くん

なんだけど」

また、ぱくっ

え？ やっぱ、ゆうこっつ

「え？ ちがうちがう。相楽くん、妹さんの世話で

むかしから料理してるから、慣れてるのよ。きつと

ぱつと作つてぱつと持つてきてくれるわ」

またまた、ぱくっ

めぐみよりうまいんだ。なんか、納得しちゃうけ

ど、いいのかなあ？

「あ、他のひとのこと考えてるでしょ。めぐみちゃ

んはもちろん作れるわ。でも、おりゃーって感じで

作るから、病氣の人にはちよつとね。いおなちゃん

は よくわからないけど、なんとなく、おっかな

びつくりな感じじゃない？」

もひとつ、ぱくっ

ふうん。よく見てるなあ

ってことはもちろん、わたしのことも見て想像してたんだよね。どーせ

像どおりですよ。

「はいはい、病人なんだから、好き嫌いくらい言っ

たつておこらないわよ。まっすいおかゆ食べて、ちゃ

んと寝ちゃえー」

「ふふ。でもね、このおかゆは、おいしいわ」

もう、なんで昆布もつままないで、おかゆだけど

んどん食べるのさ。

「いやだから、そんなに無理して食べないでよー」

つてあれ？ 引つ張られて、そのまま取られちゃっ

た？

「ここで食べるこのおかゆは、ほんとうにおいしい

の。ごちそうさまでした♡

\*\*\*\*\*

ずいぶん熱もひいたけど、お言葉にあまえて、寝かせてもらいましょか」

そう言って、カラになったナベをテーブルに戻してから、ゆうこがまたベッドに横になった。のはいいんだけど、うわわっ!?

「ごらごらごらっ！ わたしは抱き枕かっの!!」

わたしごとベッドの上に倒れ込んで、そのまま寝息立て始めちゃってるんだもん。寝つきいいなあいや、まだ起きてんのつらいのかな。

「しょうがないなあ。まったく、こうやって寝てる分にはかわいいんだから♡」

ふわあ。

「あー、寝てないのがそろそろきちゃったかあ」

なんだか、ちよつと目が重くなってきたなあちよつとだけ、いいよね。

「こんにちはー、めぐみです。ゆうゆうがここで寝てるって、ほんと?」

大使館の扉にカギがかかってないの、不用心だなあ、って思いながら、あたしは中に入ってみた。

電話にも出ないし、どうしたんだろうなーって思いつきながらおおもろご飯で話を聞いて、大使館にやってきたんだけど

「ええっ!？」

「しーっ」

ひとの気配のする部屋に入ったら、驚いちゃった。だって迎えてくれたのは、その本人なんだもん。

それに、ちよいちよい、って指さした先を見たら、

「寝てるね ゆうゆうじゃなくて、ヒメが」

「ええ、ねてるわ。満足して、ね」

満足? なんのことかな、ってちよつと思っただけど、

ゆうゆうがいつもの笑顔になったから、それ以上は聞かないよ。きつと

「ひどいなあ。なんであたし呼んでくれなかったの、ゆうゆう?」

「いいのよ。わたしも、ごちそうさまを返したかったんだから」

そっか。

ゆうゆうの笑顔が、いつもより優しい感じになって、あたしもちよつと嬉しかった。

「ほんとうに、ヒメちゃんがいてよかったなあ。ふふ♡」

—おしまい—